

## 理論經濟學(二)

荒 憲 治 郎

理論經濟學とよばれる學問領域が、わが國で何時頃から擡頭し建設されたかについては、必ずしも定説がある譯ではない。しかし、それが明治の末葉から大正年代にかけてであろうということには、かなりの意見の一致がある。

一般的にいつて、當時の一橋經濟學が、完全にわが國の指導的主流を形成していたことは、なお記憶に新しい所であろう。關・福田・佐野の三博士、瀧本・上田・三浦・石川・左右田・藤本・内池等の諸教授が、單なる實學的商業技術論を超えて、「グルンドリッヒ」な經濟學の建設に偉大な業績を残したのである。理論經濟學につ

いても、事態は同じである。とくに、福田徳三博士の斯學において演じた役割は、決定的なものであった。

福田博士の經濟學は、一方の足をブレンタノー、他方の足をマーシャルにおいていたと言われる。そしてこの歴史學派的志向と英國學派的觀相は、その後の一橋經濟學の傳統に少からざる影響を與えたものとみられる。更に、左右田・三浦の諸教授の哲學的思考がそれに加わって、單に理論經濟學の分野だけを考える場合にも、それが非常に廣汎な文化科學の基盤の上で繼承發展せしめられて行つたのである。

ところで、福田博士自身についてみれば、理論經濟學への直接の貢獻は、せいぜいの所、マーシャルの經濟學原理の祖述的研究(洛陽の紙價を高からしめた「經濟學

講義」がそれであり、明治四二年に刊行された」と、ビグーの先蹤に依據した厚生經濟學の分析（昭和五年刊行の「厚生經濟學研究」上巻および下巻）であつたと言つてよい。勿論、當時のわが國の經濟學界にとつて、マーシャル經濟學を講義の中心においたということは、恐らく革新的なことがらであつたろう。何故ならば、當時の主流は、古典學派經濟學・歴史派經濟學・マルクス經濟學のいずれかであつて、近代經濟學への關心は殆んど無視し得るものであつたからである。そして、マーシャル經濟學の理解は、その後一九三六年のケインズ「一般理論」の出版に及んで、わが國での最も進んだケインズ經濟學研究の可能性の途を用意していたのである。

## 二

マーシャル經濟學の研究は、大正八年に至り、大塚金之助教授によつてその「原理」の邦譯が行われ、一つの一里塚が建てられた。しかし、われわれは、順序として、第一に中山伊知郎教授を中心とする數理經濟學の建設に注目しなければならぬ。

### 理論經濟學（二）

「厚生經濟學研究」の序文において、福田博士は、次の如き注目すべき敘述を與えておられる。

「私は、一方には、ワラス・エデウオース・パレット・フィッシャー諸氏の數理的研究に大なる期待をかけるものであります。しかし私自ら數學に拙い爲め、其方面のことは、唯僅かにこれを學び得るのみで、自分で工夫を着ける資格も勇氣も有ちません。幸ひ私の同學中二三の方々は其方面に精進して居られます。他日大なる收穫を期待し得ると思ひます。殊にヴェクトル數理、マトリックス數理への進出は大いに有望らしく考へられますが、今日のところ未だ前途遠遠の憾は免れません。従つて私に残された唯一の道は、ホブソン・ビグー・キャンナン諸先生が荊棘を拓かれた厚生經濟學への進出これでありませう。」（序文五—六頁）

今日にして思えば、福田博士の指摘された數理經濟學と厚生經濟學の進出は、恐らく現代の理論經濟學の二大主流であつて、最早、常識的なことがら以外の何物でもない。しかし、わが國の理論經濟學の黎明期において、今日の理論經濟學の方向を喝破されていたということ

は、記憶に値することであろう。序でに、大正末期および昭和初期ごろに、一つの社會科學の大學において、經濟學と數學とが同時に學び得る態勢にあったのは、ドイツのボン大學と一橋大學だけであつたと言われる。

中山教授が一橋において數理經濟學を開講されたのは昭和五年である。それ以前において昭和二年に、教授のクルーノーの翻譯があるが、一橋の數理經濟學に直接又は間接に貢獻した研究文獻として、次のものが挙げられるであろう。

手塚壽郎「ゴッセン研究」(大正九年)

中山伊知郎「クルーノー・富の理論の數學的原理に関する研究」(昭和二年)

久武雅夫「フィシャー・價值と價格の理論の數學的研究」(昭和八年)

手塚壽郎「レオン・ワルラス純粹經濟學要論」(上巻昭和八年)

中山伊知郎「數理經濟學研究」(昭和十二年)

ところで、昭和の初頭において、「數理經濟學」という獨立講義の存在自體が、正に當時の經濟學界にとって革

新的なものであつたといつてよい。そしてこの試みは、やがて中山教授の「純粹經濟學」(昭和八年刊行)となつて現われたのである。

「純粹經濟學」の出現は、恐らく、わが國の理論經濟學の發達において、明かに最初の道標を確立したと言つても過言ではない。それに盛られた内容は、今日では最早、理論經濟學者の共有財産となつてゐるけれども、當時では、全く未開拓の分野であつた。そしてこれによつて、恰も福田博士がマルクス經濟學およびマーシャル經濟學の先驅的導入によつて、わが國における一橋經濟學の地位を不動なものにしたのと同じように、理論經濟學界における一橋大學の地位を確保するのに重要な役割を演じたのである。

中山教授の立場は、嚴密にはマーシャルの傳統の中にあるのではない。むしろ、クルーノーからマーシャルに連なる特殊均衡分析に對して、ワルラスおよびバレットの傳統に従う一般均衡分析を出發點としてゐるのである。そしてこのような出發點は、經濟理論の純粹性という觀點からとられたものであつた。しかし、一度び經濟

現象の理解のための純化作業が完了してしまつた後では、あくまでワルラス的一般均衡論の桎梏に服する必要はない。教授はシュムペーター經濟學との結びつきによって、稔り豊かな經濟動態論への途に歩を進めたのである(恐らく、ワルラスからシュムペーター經濟學への途が、ワルラスの直接的系譜に立つヒックス一般均衡論を一橋にそれほど深く根を下さしめなかつた最大の理由であつたと思われる)。

時、一九三六年(昭和十一年)に至り、ケインズ「一般理論」が世に問われた。しかし、その以前において、ケインズ「貨幣論」(一九三〇年)が鬼頭仁三郎教授によって邦譯せられ(昭和七年—九年)、ケインズ研究の基礎が用意されていた。そして「一般理論」の出版と同時に、この大學の經濟學を擔う多くの人々によって、いち早く分析の俎上にとり上げられ、完全にわが國理論經濟學界におけるケインズ研究の先導權が確立されたのである。戦前までの主要文獻として、次のものが掲げられよう。

中山伊知部「發展過程の均衡分析」(昭和十四年)

中山伊知郎編「ケインズ一般理論解説」(昭和十四年)

理論經濟學(二)

高橋泰藏「貨幣的經濟理論の新展開」(昭和十五年)  
鬼頭仁三郎「貨幣と利子の動態」(昭和十七年)

この中、中山教授の「發展過程の均衡分析」は、當時の理論經濟學界の最大の理論的所産とされたものであり、ワルラス・シュムペーター・ケインズの經濟理論の批判的綜合の研究であつた。

三

轉じてマーシャル經濟學の展開に視點を投じよう。恐らく、昭和年代の一橋經濟學に關與せる凡ての人々は、多かれ少かれこの展開に貢獻しているといつても過言ではない。しかし、この中でも、最大の努力を傾けた人は、杉本榮一教授であつた。

杉本教授の出發點は明かにマルクス經濟學であつたが(そして教授は戦後再びマルクス經濟學に復歸した)、終戦の年まではマーシャル經濟學の研究に多くの情熱を捧げた。

克く知られているように、ワルラス一般均衡論に對して、マーシャルは特殊均衡論の立場に立っている。中山

教授は特殊均衡論を超越するものとしての一般均衡論を純粹經濟學の基礎にすえたのであるが、杉本教授はマーシャルが特殊均衡論の立場をとらざるを得なかつた理由——經濟構造の異質性と經濟過程における時間要素の役割の重要性を強調することによって、數理經濟學の王座に君臨していた一般均衡論に對し不斷に批判の矢を向けていた。教授のかかる立場は、やがて昭和十四年に刊行された「理論經濟學の基本問題」に結晶する。特に、均衡概念に對する不均衡化過程の強調は、ローザンヌ學派に對するマーシャル經濟學の特色として、理論經濟學界に大きな波紋を投じたのである（翌昭和十五年には、「マーシャル經濟學選集」が、一橋經濟學のメンバーの結集によって翻譯出版せられた）。

一般的に言つて、福田博士の當時より、一橋經濟學には大きな論争が活潑に行われてきた。論争の過程において社會科學の進歩を築きあげてゆくという傳統は、中山教授と杉本教授の場合にもあてはまる。概して言えば、方法論に關する論争は、それが方法論の領域にとどまり限り生産的ではない。中山教授の場合には、既に「純粹

經濟學」より「發展過程の均衡分析」に至る経過において、一つの独自の經濟學システムが完成されていたし、特に後者においては必ずしもローザンヌ學派の領域にとどまっておらず、ケインズ體系をさえも包攝し得るような廣汎な地盤で、經濟發展の問題が開示されていた。従つて、どちらかと言えば方法論の段階での杉本教授の一般均衡論批判は、その批判に立脚した積極的な經濟システムの確立がなされるまでは、いまだ有效ではなかつた。戦後、杉本教授は、マーシャルを超えて、その經濟體系の母胎をマルクス經濟學に求められたが（その輪廓は「近代經濟學史」（昭和二十八年）に示された。これは、他に類書をみない杉本教授獨特の經濟學說史である）、未完成のままに永眠の旅につかれ、わが國理論經濟學界のユニークなアカデミズムの闘士を失つたのである。

さて、われわれはここで、數理經濟學の發展と、特に杉本教授との關連において、一橋大學における計量經濟學の存在にふれなければならない。既に最初に指摘したように、數理經濟學の先驅的役割を擔つていた一橋經濟學において、經濟理論と統計學との結合たる計量經濟學

の發展は、當然に豫期し得るところであつた。そしてこの分野においても、一橋が學界の中心であつたことは、日本計量經濟學會（昭和二十六年に成立）の成立事情よりみて明白である。そして、これに先立ち一九三五年に發表された杉本教授の「米穀需要法則の研究」は、わが國における恐らく本格的な計量經濟學研究の嚆矢をなすものであつた（計量經濟學および数理經濟學の詳しい發展については、次章の關氏の論稿を参照されたい）。

#### 四

再び轉じて、厚生經濟學の發展に概觀を與えなければならぬ。福田博士の經濟學研究は、日本經濟史から社會政策に至る非常に廣汎な領域に亘つていた。晩年に至つて、その研究の視點は、社會政策・經濟政策を含む厚生經濟學に結集されたのであるが、そのような方向が、同じように一橋經濟學の發展の上に大きな影響を與えたことは否定し得ない所であろう。井藤・赤松・山中・山田・板垣の諸教授は、今日の社會政策學界および經濟政策學界の中心的存在として、常に學界をリードされてお

#### 理論經濟學（二）

られるのである。特に逸すべからざる特色は、その學問の背後にある哲學的思考の廣さであろう。既に指摘したように、これはこの大學の學問の幅の廣さを示す決定的特徴であつた。しかし、ここでは、問題を理論經濟學の發展という側面に限定する。

イギリス經濟學における實踐的經驗主義の尊重が如何にして厚生經濟學に結實して行つたかという問題は、經濟學史家の好んでとりあげる課題である。マーンシャル經濟學の直線的系譜たるビグーの「厚生經濟學」が、この學派の中心的著作たることは論ずるまでもない。

中山教授は、昭和十一年の「厚生經濟學」において、ビグーの著書の全面的な祖述的研究を發表された。その先驅的役割は、今日においても充分に注目しなければならぬ。しかしやがてその本格的な研究は、山田雄三教授の「計畫の經濟理論（序説）」（昭和十七年刊行）となつて發表された。

山田教授の立場は、經濟理論と經濟政策との結合という問題を、「計畫理論」という形で展開しようとする所にある。従つて、分析の對象は、單に「厚生經濟學」に

限定されてはおらず、經濟政策の理論の凡ての分野に及んでいる(但し、教授の、昭和二十三年刊行の「ビグー厚生經濟學」は、ビグーに關する批判的研究である)。しかし、この著作を通じての均衡的な考え方は、充分に注目してよい。すなわち、國家の經濟計畫を、限界原理に基礎を置く價格理論の上で明かにされようとしているのである。次いで、「資本主義經濟計畫と社會主義經濟計畫」(昭和二十三年)を経て、「國民所得の計畫理論」(昭和二十四年)に至り、國家の經濟計畫の行われる具體的な場を「國民所得の循環」ということの中に求められ、今日の理論經濟學の中心テーマたる國民所得分析に、先驅的役割を果たしたのである(克く知られているように、ビグーの「厚生經濟學」は國民分配分を中心とする分析であって、山田教授が國民所得の分析に歸趨されたということは、決して偶然ではない)。

## 五

以上で、特に昭和年代における理論經濟學の發展の展望を終える。一部は紙數の制限のため、一部はテーマの

制限によって、當然にふれるべかりしものをふれずに残した。最初にも指摘したように、この大學では、理論經濟學も社會科學又は文化科學の一分野として、非常に廣大な基礎の上に展開されてきたのである。特に、アダム・スミス研究については殆んど教養と言っても過言ではない程に、凡ての人々のバック・ボーンとなっている。更に、歴史學派、特にリスト研究についての卓越した業績も充分に注目してよい。例えば、高島善哉教授の「經濟社會學の根本問題」(昭和十六年刊行)および板垣與一教授の「政治經濟學の方法」(昭和十七年刊行)は、當時の經濟學界の最も野心的な價値高き業績であった。

思うに、このような社會科學全體の上で經濟理論を考えるという態度は、やがて総合的な經濟理論の建設の土臺となる。過去および現在の一橋經濟學を擔ってきた殆んど凡ての人々は、それぞれの分野において、一つの完結したシステムをもった人として、明かに學界の指導者となっているのである。如何なる經濟問題も、その総合的なシステムの一隅に席を見出さざるはなく、さればこそ一橋經濟學の傳統が維持されてきたのである。

しかし、この大學の理論經濟學にも、反省の必要がない譯ではない。われわれはその一つを、一橋アカデミズムと呼ばれるものの中に發見し得ると思う。

廣濶な文獻の獵歩、綿密な資料の探索、およそアカデミズムにつきもののこのような學問的良心は、輕薄な知識によって實際の經濟問題に誤れる處方箋を書くのと著しい對蹠をなす。明かにこの大學では、福田博士の時代より、アカデミックな經濟學の傳統が守られてきたのである。經濟學に傳統のないこの國において、文獻に依存し、文獻を理解し、また文獻の中から綜合體系を求めるといふ態度は、恐らく必要でもあつたし、この國の國民性とも完全に兩立した。

しかし、今や、輸入經濟學の時代は反省の時期に立っている。もちろん文獻を通じて反省の資を求めめることは必要であろう。また文獻の咀嚼によって啓蒙的役割を果たし、かくして經濟學の日本の水準を維持するのも、この大學の傳統からみて、それ程に困難なことではない。しかしながら、この國の理論經濟學界は、もはや單なる啓蒙的輸入を必要としない程までに成長したのである。

理論經濟學(二)

われわれは、日本の理論經濟學界より眼を轉じて、世界の理論經濟學界に視點を向けなければならぬ。世界の理論經濟學界に伍して独自の發言をなす——左右田博士はその輝かしき一人であつた——という氣概は、何よりも先ず、植民地的解説經濟學からの離脱から始められなければならない。日本經濟についての實證的研究は、その一つの動向であろう。そしてその方向は、戦後、とくに一橋經濟研究所を中心に強力におし進められている。もちろん、その他の分野についても同様であつて、かかる機會は充分に熟しているのである。

翻つて、現實の經濟問題の關心について想う。もしも經濟學者にして象牙の塔に立ち籠るならば、誰が日常の經濟問題に適確な指針を與えるのであろうか。マーシャル經濟學の傳統は、象牙の塔とは兩立しない。この大學の「温き心と冷き頭腦」の凡てを日本經濟の發展のために提供して、如何ほどの悔があろうか。そして、一橋經濟學への興望は、重且つ大となつているのである。

(一橋大學講師)